

〈資料〉

高校生対象の交流型入学前準備プログラム参加の有無と 大学入学後の大学生生活適応感との関連

The Relationship Between Participation in a Pre-Enrollment Interactive Program for
High School Students and Their Adjustment to University Life after Enrollment

西山由紀子¹ 伊藤美千代¹ 菊池有紀¹ 田所由利子¹ 大西淳子¹ 古代真穂¹

藤巻郁朗²

佐野貴康³

1 東京医療保健大学 千葉看護学部 看護学科

2 元 東京医療保健大学 千葉看護学部 看護学科

3 武蔵野中央病院

Yukiko NISHIYAMA¹, Michiyo ITO¹, Yuki KIKUCHI¹, Yuriko TADOKORO¹, Junko ONISHI¹, Maho KOSHIRO¹

Ikuro FUJIMAKI²

Takayasu SANNO³

1 Division of Nursing, Chiba Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

2 Former Division of Nursing, Chiba Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

3 Musashino Central Hospital

要 旨：目的：高校生対象の交流型入学前準備プログラム（以下、交流型プログラム）参加の有無と大学入学後の大学生生活適応感との関連を明らかにした。

方法：東京医療保健大学千葉看護学部 2024 年度と 2025 年度入学生全員（217 人）を対象に無記名 Web 調査で交流型入学前準備プログラムの参加の有無、参加による学生生活への良い影響の有無、大学生生活適応感の調査を実施した。

結果：本研究対象者の大学生生活適応感は、「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」、「拒絶感の無さ」すべてにおいて高い状態であった。「居心地の良さの感覚」のみが交流型プログラム参加の有無と有意な関連を認めた。

考察：本学部の交流型入学前準備プログラムにおける入学予定者間、在学生および教員との関わりは大学生生活適応感の「居心地の良さの感覚」に寄与したと考える。大学生生活適応感を高めることを目指す場合は、「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」、「拒絶感の無さ」の先行要因等を収集する必要がある。

Abstract : Objective : To examine the relationship between high school students' participation in a pre-university enrollment interactive program and their adjustment to university life.

Methods : An anonymous web-based survey was conducted with all 217 students enrolled in the Division of Nursing, Chiba Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University, during the academic years of 2024 and 2025.

Results : The participants demonstrated high levels of adjustment to university life across all dimensions, including a sense of comfort, perceived trust and acceptance, a sense of having tasks and goals, and an absence of feelings of rejection. Among these dimensions, only "sense of comfort" was significantly associated with participation in the interaction-based program.

Discussion : The interactions among prospective students, current students, and faculty members within the faculty's interaction-based pre- university enrollment preparation program is considered to have contributed to the "sense of comfort" dimension of new students' adjustment to university life. To further enhance the adjustment to university life, it is necessary to identify and examine the antecedent factors related to perceived trust and acceptance, a sense of having tasks and goals, and an absence of feelings of rejection.

キーワード : 大学生生活適応感、高大接続、入学前教育

Keywords : Sense of adaptation to university life, transition from high school to university, pre-entry preparation programs

I . 緒言

現代社会は、グローバル化の進展や人工知能技術の革新に伴い社会構造が急速に、そして大きく変化し予見困難な時代となっている。その中で、新たな価値を創造できる力を育むことが求められ、義務教育から高等教育にかけて一貫して重視されているのが「学力の3要素」である。これは、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」であり、高等学校で確実に育成し、大学教育でさらなる伸長をはかるためには、その両者をつなぐ高大接続改革が重要となる¹⁾。

一方、学生は、低学年では、学業、体調、教室のきれいさ、納得のいかない評価、時間がないなど多様なデイリーハッスルに加え、時間的ゆとり、友人関係、行事、学業などが入学前の期待と異なるリアリティショックを経験することが報告されている^{2) 3)}。そして、このリアリティショックは大学生生活適応感の要因とされている³⁾。中でも新入生は、履修登録の手続き、高校とは異なる大学の仕組みの理解、講義への出席と課題の遂行、前期試験への対応、長期休暇(夏休み)による生活リズムの変化、単位取得状況の通知、そして新学期の開始といった一連のイベントに次々と直面する⁴⁾。新入生にとっては、これらにうまく対処しながらスケジュールをこなしていくことは容易ではなく、入学直後は、大学生活への適応において「ヤマ場」となる時期と言われている⁴⁾。そのため、高校生活から大学生活への適応は、学生のメンタルヘルスの維持、学生生活に対する満足感の向上、学習成果の獲得や大学生生活の継続において極めて重要となる。

全国500校の大学を対象とした入学前教育の実態調査では、設置区分(国立、公立、私立)、偏差値帯別

に違いはあるが、学習習慣の維持、学力維持・向上、高校卒業レベルの基礎学力の確認・補修、大学入学後の不安解消(学力面と生活面)、苦手分野の克服、大学での学習遂行に係るスキル開発などを目的として、約84.5%の大学で入学前教育が実施されていることが報告されている⁵⁾。

千葉看護学部では、総合型選抜および学校推薦型選抜の合格者を対象に、自己学習習慣を継続し入学すること、看護学への関心や学ぶ意欲を維持すること、入学後のスタディ・スキル獲得準備をすることを目的とした入学前準備プログラムを2019年より実施している⁶⁾。本プログラムは、【入学前にやっておこう】、【看護の世界をのぞいてみよう】、【大学の学修を知ろう】の3プログラムより構成されている(表1)。特に、【大学での学修を知ろう】は、入学前に同級生と接する機会となる交流型プログラムである。同級生との関係性の構築は、大学適応感と関連があり⁷⁾、所属感や情動・情緒的支援の獲得を促すとされている⁵⁾。つまり、本学部の入学前準備プログラムの交流型プログラムは、入学直後の大学生活への適応およびそれに連動する学業・情動面の適応を高める可能性があると考え、本研究に着手した。

II . 目的

高校生対象の交流型入学前準備プログラム参加の有無と大学入学後の大学生生活適応感との関連を明らかにすることを目的とした。

表1 選抜形態別入学前準備プログラム

構成	入学前にやっておこう		看護学の世界を のぞいてみよう	大学の学修を知ろう		
	実施形態	通信教育	オンデマンド e-learning	交流型		
プログラム 内容	2024年:生物 2025年:英語	大学での学修と 自己学習計画立 案	Web教材による看 護学の自己学習	①先輩が語る実 習経験談と学生 交流	②計画的な学修と 学生交流(2024年) ②大学講義体験と 学生交流(2025年)	③地域交流イベ ントへの参加と学 生交流
実施時期	12~2月	12月	11月~3月	11月	1月	3月
選 抜 形 態	総合型	○	○	○	○	○
学校推薦型	○	○	○	-	○	○
一般	-	-	-	-	-	○

○は実施対象者、-は実施対象者外を示す

Ⅲ．研究方法

1. 研究対象者

研究参加への同意を得た東京医療保健大学千葉看護学部2024年度と2025年度入学生全員（217人）を対象とした。

2. 入学前準備プログラムの内容

入学前準備プログラムは、【入学前にやっておこう】、【看護学をのぞいてみよう】、【大学での学修を知ろう】の3部構成となっている。【入学前にやっておこう】は、單元ごとに確認テストがある通信教育と大学での講義、スタディ・スキルズや自己学習立案方法の動画視聴で、【看護学をのぞいてみよう】は、入学後使用するe-learning教材の一部を使い看護学に関心を持つためのe-learningである。【大学での学修を知ろう】が、本稿で焦点をあてる交流型入学前準備プログラム（以下、交流型プログラム）であり、在學生、入学予定者、教職員等との交流ができるプログラムである。この交流型プログラムの内容は3つで構成されている。一つ目の、①先輩が語る実習経験談と学生交流（以下、①）は、先輩が語る実習経験談を聴き、入学予定者は看護学を学ぶイメージをつくり看護学への関心を維持・向上しながらグループで在校生に質問し入学前の準備について考える。二つ目の②計画的な学修と学生交流(2024年)、大学講義体験と学生交流（2025年）（以下、②）は、2024年度は在學生のノートを観ながら、2025年度はからだの仕組みとはたらきのミニ講義を受講し、大学での学修に必要なスタディ・スキルズを理解し、計画的学習に取り組む。さらに1,2年生と交流し学生生活の準備を促す。三つ目の③地域交流イベントへの参加と学生交流（以下、③）はグループで在學生とともに地域交流イベントに参加をし、在校生や入学予定者間、教職員とも交流し学内施設にも慣れるプログラムとなっている。

3. 調査方法

無記名Web調査を実施した。授業以外の時間帯で、研究者が書面を用い研究概要を説明し退室した後、学生にメールでWeb調査のURLを送信した。調査期間は、2024年度入学生は、2024年5月27日～7月2日、2025年度入学生は、2025年5月22日～5月28日とした。

4. 調査項目

選抜形態、各交流型プログラム参加の有無、交流型プログラム参加による大学生活に良い影響の有無、大学生生活適応感について調査した。

大学生生活適応感は、私立大学の学生を対象に併存妥当性、因子妥当性、内的整合性は確認されている大学生適応感尺度（29項目）を用いた。この尺度は、「居心地の良さの感覚（10項目）」、「被信頼・受容感（6項目）」、「課題・目的の存在（7項目）」、「拒絶感の無さ（6項目）」の4つのサブスケールより構成され、「全くあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」までの5件法で合計得点を算出し、得点が高いほど適応感が高いことを示す⁸⁾。

交流型プログラムへの参加による大学生活に良い影響の有無は、交流型プログラムへの参加が、あなたの入学後の大学生生活により影響を与えたかの間に、「はい」、「いいえ」で回答を求めた。

5. 分析方法

大学生生活適応感に2024年度と2025年度の回答に有意差が無いことと、大学生生活適応感の分布を確認した上で、交流型プログラム①②③への参加の有無と大学生生活適応感との関連について、スピアマンの順位相関係数を算出した。分析には統計ソフトSPSSver31を用い、有意水準5%の両側検定を行った。

表2 入学年度別・全体の対象者の特徴

	2024年度入学生 (n=66)		2025年度入学生 (n=68) ¹⁾		全体 (n=134)	
	(人)	(%)	(人)	(%) ^{n.s.}	(人)	(%)
選抜形態						
総合型	10	(15.2)	11	(16.2)	21	(15.7)
学校推薦型	25	(37.9)	25	(36.8)	50	(37.3)
一般	31	(47.0)	32	(47.1)	63	(47.0)
交流型プログラム参加回数						
0回	24	(36.4)	26	(38.2)	50	(37.1)
1回	17	(25.8)	12	(17.7)	29	(21.7)
2回	19	(28.8)	23	(33.8)	42	(31.5)
3回	6	(9.0)	7	(10.3)	13	(9.7)
交流型プログラムへの参加が 大学生生活に良い影響を与えた						
はい	40	(60.6)	37	(54.4)	77	(57.5)
いいえ	26	(39.4)	31	(45.6)	57	(42.5)

¹⁾選抜形態、対面プログラム参加回数と年度の差はKruskal-Wallis検定、大学に良い影響を与えたの年度の差は、 χ^2 乗検定を行った

表3 各入学年度・全体の対象者の大学生生活適応感

大学生生活適応感 (Range) ¹⁾	2024年度入学生 (n=66)			2025年度入学生 (n=68) ¹⁾			全体 (n=134)			
	中央値	第1四分位	第3四分位	中央値	第1四分位	第3四分位	中央値	第1四分位	第3四分位	
合計得点 (29-145)	116.5	104.8	130.3	116.5	100.3	129.0	^{n.s.}	112.0	102.2	129.4
居心地の良さ感覚 (10-50)	40.0	36.0	46.3	40.5	36.3	46.0	^{n.s.}	40.4	36.2	46.3
被信頼・受容感 (6-30)	22.0	18.0	25.0	21.0	18.0	24.0	^{n.s.}	21.4	18.2	24.7
課題・目的の存在 (7-35)	27.0	24.8	30.0	27.0	24.0	29.8	^{n.s.}	27.0	24.2	29.7
拒絶感の無さ (6-30)	28.0	24.0	30.0	27.0	23.0	30.0	^{n.s.}	27.3	23.2	29.5

¹⁾大学生生活適応感の年度の差はMann-WhitneyのU検定を行った

表4 交流型プログラム参加の有無と大学生生活適応感との関連

交流型プログラムへの参加の有無	n=134				
	適応の合計得点	居心地の良さ感覚	被信頼・受容感	課題・目的の存在	拒絶感の無さ
	.122	.176 [*]	.052	.073	.100

^{*}P<.05(両側検定) 検定はスピアマンの順位相関係数を算出した

IV. 倫理的配慮

本研究は東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号:T24-01B-R2) 対象者へは口頭および文書にて、研究の概要、ならびに研究への参加は任意であること、無記名調査であるため教員は参加の可否は分からないことを口頭およびWeb調査開始時に文書で表示するようにし説明した。

本研究で使用する大学生適応感尺度は、尺度開発者から電話にて使用許可を得た。

V. 結果

(本文中数値の前者は2024年度入学生、後者は2025年度入学生の回答を示す)

回答者(率)は2024年度・2025年度入学生それぞれ

67人(67.6%)・68人(57.6%)で、全体では135人(62.2%)となった。そのうち、同意欄にチェックがなかった1人を除き134人を分析対象とした(有効回答率61.7%)。

1. 対象者の特徴(表2)

選抜形態は、2024年度・2025年度の総合型選抜は、10人(15.2%)・11人(16.2%)、学校推薦型選抜は、25人(37.9%)・25人(36.8%)、一般選抜は31人(47%)・32人(47.1%)であった。交流型プログラムへの参加は、0回が24人(36.4%)・26人(38.2%)、1~3回参加は42人(63.6%)・42人(61.8%)であった。交流型プログラムへの参加が大学生生活に良い影響を与えた者は、40人(60.6%)・37人(54.4%)であった。上記全ての項目で2024年度と2025年度で有意な差は無かった。

2. 大学生生活適応感 (表3)

入学年度別大学生生活適応感の中央値は、2024年度・2025年度合計得点は116.5点・116.5点、下位尺度の「居心地の良さの感覚」は40.0点・40.5点、「被信頼・受容感」は22.0点・21.0点、「課題・目的の存在」は27.0点・27.0点、「拒絶感のなさ」は28.0点・27.0点、合計得点とすべての下位尺度で入学年度による有意な差は無かった。なお、対象者の大学生生活適応感の平均値と標準偏差は、合計得点が 114.1 ± 18.72 点、居心地の良さの感覚は 40.1 ± 7.50 点、被信頼・受容感 21.3 ± 5.10 点、課題・目的の存在は 26.7 ± 4.95 点、拒絶感の無さは 25.9 ± 4.31 点であった。

3. 交流型プログラム参加の有無と大学生生活適応感の関連 (表4)

大学生生活適応感の合計得点ならびにすべての下位尺度の α 係数は.814 ~ .955であった。交流型プログラムの参加の有無と大学生生活適応感、「居心地の良さの感覚」との間には、有意な正の相関 ($r = .176, p = .042$) が認められた。「適応合計」($r = .122, p = .161$) や「課題・目的の存在」($r = .073, p = .339$)、「被信頼・受容感」($r = .052, p = .552$)、「拒絶感の無さ」($r = -.100, p = .250$) については、有意な関連は認められなかった。

VI. 考察

本研究は、交流型プログラムへの参加が、入学後初期の大学生生活適応感に関連するかを検証した。分析の結果、有意な関連が認められたのは「居心地の良さの感覚」であり、「被信頼・受容感」「課題・目的の存在」「拒絶感の無さ」とは関連が認められなかった。また、大学生生活適応感については、本研究対象者の得点は、先行研究の私立文系大学1年生4月の調査結果に加え、4月より有意に高い10月の調査結果と比較しても高い得点であった⁹⁾。

交流型プログラムへの参加の有無が、大学での「居心地の良さの感覚」と有意に関連していたことは、友人・教員との関係が居心地の良さの予測因子であるという先行研究と一致する¹⁰⁾。これは、交流型プログラムでは、入学予定者が入学予定者間、在校生、教員と関わりを持てる機会を提供していることが影響している可能性があると考えられる。大学生生活適応感は、「友人との関係」の影響が強く、周囲に溶け込み、なじんでいることから気楽さや快適さが生まれ、居心地の良さを想起させるためであるとの指摘もある¹⁰⁾。交流型プログラムへ参加することにより、すでになじみのある友人ができ、入学後早期に周囲に溶け込み、馴染

めていた可能性があったと考える。

一方、大学生生活適応感の「被信頼・受容感」は、交流型プログラムへの参加とは有意な関連は認められなかった。「被信頼・受容感」は、他者から頼られている、必要とされている等と感ずることであり、グループワークで自ら役割を果たして課題に貢献することが、学業面での信頼感や受容感に影響するとされる¹⁰⁾。これと照合してみると、本学部の交流型プログラムは、友人や教員との関係構築のきっかけにはなるものの、その交流の中では課題解決における役割を担う内容はないことや、初めて顔を合わす場では限界があるものと推察できる。そのため、交流型プログラムへの参加と「被信頼・受容感」は関連していなかったと考えられる。「課題や目的の存在」が関連しなかった背景には、大学生活への適応感が対人関係のみならず、学業への取り組みによっても影響することが先行研究で指摘されている¹⁰⁾。本研究においても友人や教員との関係のみでなく、学業への取り組みが影響した可能性がある。さらに「拒絶感の無さ」に関連が認められなかったことは、拒絶感是他者との継続的な交流、対人刺激、仲間関係の形成と失敗で感ずることが多い。そのため、交流型プログラムの場合は、入学予定者にとっては、他の入学予定者、在校生、教員と初めて顔を合わせ交流する機会であることから、拒絶感の無さとの関連は認められなかったと考えられる。今後、交流型プログラムの内容の検討、入学後の学修支援との連携が重要になる。

大学生生活適応感については、本研究対象者の得点は他の大学の研究結果に比べ総合的に高水準であった⁸⁾。これは、看護系大学への入学者は看護職を目指すという明確な目的を有す入学生が多く、進学動機が明確な学科の大学生生活適応感が高い¹¹⁾¹²⁾、専門職に就くことを目標とし入学する学生は主体性があり適応感が高く保持されやすいという先行研究と一致する¹³⁾。さらに、先行研究では男性より女性の方が大学への適応が良いことが報告されており¹⁴⁾、本研究の対象者は女性が多かったことも大学生生活適応感の得点が高かったことに影響していると考えられる。

本研究は、現在実施している交流型プログラムと大学生生活適応感との関連を確認した。大学生生活適応感を高めるプログラムを進めて行く場合には、今回関連がなかった「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」、「拒絶感の無さ」に関して、先行要因なども収集し研究していく必要がある。

Ⅶ. 結論

看護系大学入学者である本研究対象者の大学生生活適応感が高い傾向にあること、ならびに、交流型プログラム参加は、大学生生活適応感の「居心地の良さの感覚」と正の相関があり、交流型プログラムで友人や教員との関わる機会が鍵となっていることが示唆された。また、大学生生活適応感の合計得点「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」、「拒絶感の無さ」は、有意な関連は認められなかった。

利益相反

研究者らは本研究に関し開示すべきCOI関係にある企業、組織、団体等はありません。

文献

- 1) 文部科学省HP 1-1-1「高大接続改革」とはどのような改革ですか;文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1402115.htm (参照2025-5-15)
- 2) 平野優子. 大学低学年生におけるデイリーハラスルと入学前後のストレスフルで重大な出来事との関連. 学校保健研究. 2005;47:201-208.
- 3) 千島雄太, 水野雅之. 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響—文系学部の新入生を対象として—. 教育心理学研究. 2015;63:228-241.
- 4) 山田ゆかり. 大学新入生における適応感の検討. 名古屋文理大学紀要. 2006;6:29-36.
- 5) 山本以和子, 花堂奈緒子, 林寛子, 當山明華. 高大接続改革に係る入学前教育の実施状況と課題. 大学入試研究. 2024;34:182-189.
- 6) 吉田澄恵, 山花令子, 山本由子, 田所由利子. スタディ・スキルズ獲得支援に向け入学前準備教育プログラムの実践報告. 東京医療保健大学紀要. 2020;14(1):171-177.
- 7) 渡邊賢二, 堤貴之. 大学新入生の友人関係の変化と適応感との関連: 短期縦断調査より. 皇學館大学紀要. 2017; 55: 106-122.
- 8) 大久保智生, 青柳肇. 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から. パーソナリティ研究. 2003;12(1):38-39.
- 9) 大久保智生, 青柳肇. 大学新入生の適応に関する研究—社会的スキルは後の適応を予測するか?—. 人間科学研究. 2005;18(2):207-213.
- 10) 榎本光邦. 医療系大学における新入生の大学適応感に及ぼす大学生生活要因の影響. 群馬パース大学紀要. 2016;21:5-15.
- 11) 磯部有希, 上村佳世子. 大学への進学動機と学校適応感との関. 文京学院大学人間学部研究紀要. 2007;9(1):51-61.
- 12) 佐藤典子. 音楽大学への進学理由の認知と進学の適応について. 教育心理学研究. 2001;49:175-185.
- 13) 山田裕子, 宮下一博. 医療系大学生の進路選択・大学適応感・アイデンティティ形成 について—文献レビューによる考察—. 千葉大学教育学部研究紀要. 2015;63:111-119.
- 14) 大久保智生, 川田学, 江村早紀, 折田祐希. 大学新入生の自律的進学動機が大学生活への適応に及ぼす影響. 香川大学紀要. 2010;7(3):71-87.